

『オリヴィエ・メシアン：影響を受けた人物、思想』

伊藤美由紀（2400文字）

オリヴィエ・メシアン(1908-1992) の作品の特徴として、リズム法、鳥の歌、カトリック信仰が挙げられる。これらの特徴は、誰からどのように影響を受けてメシアンの作品の真髓を構成し、彼特有の音楽語法と成し得たのか考えてみたい。

メシアンは、詩人である母、セシル・ソーヴァジュと、英語の教師である父、ピエール・メシアンの息子としてアヴィニョンに生まれた。母のことを「私の思考の聖母」と呼んでいるように、メシアンにとって、母親の影響は、人生を通して意義のあるものであった。彼女の2冊の主著《地は回れど》と《谷間》の、前者に含まれる《芽生える魂》は、息子を身ごもっていたときに靈感を受けて書いたもので、特に、本人にも影響を与えている。また、母の詩的直感性に感銘を受け、自分が音楽家になったのは、彼女の直感が自然に導いてくれたのであると語る。一方で、父はシェイクスピアの作品研究、全翻訳をしていたことから、子供の頃には、舞台装置に関心を持ち、模型を作ったりしていた。言語に深く関わっていた両親からの影響は、メシアンの作品制作に大きく作用している。特にリズムの探求は、彼の作品で不可欠であり、鳥の声、他言語からの音韻など、作品のなかで応用されている。また、母の詩を通して、プロヴァンスの自然の精神を受け継ぐ。子供の頃から自然に惹かれ、14か15歳のときに、田舎で初めて鳥の歌の採譜をしたと語る。

パリのコンセルヴァトワール時代の師匠のなかで、特に影響を受けた人物の中には、音楽史を教わったモーリス・エマニュエルと、作曲家のポール・デュカがいる。前者は、ギリシャ音楽とその音律学の研究に導き、インドの旋律も研究していた。後者は、音と色彩の関係において影響を与えている。デュカは、彼に「鳥たちを聴きたまえ、彼らこそ偉大な教師だ」と言っていた。その忠告に従い、もともと子供のころから親しんでいた鳥の声を、専門家の知識を参考にしながら採譜を行うようになる。鳥の複雑な音色とリズムに魅了され、音として体系化しようとした。その結果、1940年代から50年代にかけて、鳥の歌を中心とした作品を制作する。ピアノと管弦楽の為の《鳥たちのめざめ》から、本格的に鳥に焦点をあてる。38種類の鳥を表現し、鳥の名前はテーマの下に書かれており、楽譜の下につけられた擬音が音を探す手助けとなるであろうと、

メシアンは言う。この作品と対をなす、やはりピアノと管弦楽の為の《異国の鳥たち》では、中国、インド、アメリカ大陸などの珍しい鳥も含んだ48種類の鳥を表現している。その集大成とした作品の《鳥のカタログ》は、77種類の鳥の声が、全7巻13曲で構成されており、全演奏時間は3時間以上を要する大規模なピアノソロ作品である。

オルガニストのマルセル・デュプレには、即興演奏の才能を認められ、オルガンを学び始める。オルガンにおけるリストであったとメシアンは語る。彼の作品様式を探求し、即興演奏を思うままに行う方法を見だし、22歳から50年以上、パリの聖トリニテ教会のオルガニストを勤める。もちろん、即興演奏のみならず、その経験から、オルガン作品の傑作が生まれた。また、デュプレは、ギリシャ語のリズムでの即興演奏を課題にし、著書「即興法教程」ではギリシャ語のリズムについて述べている。上記したモーリス・エマニュエルのギリシャ語のメトリックを中心とした講義を受講したことと同時に、ギリシャの韻律法を研究し、作品の中でリズム法に応用するきっかけとなっている。

メシアンは、敬虔なカトリック信者としても有名である。しかし、両親は信者ではなく、読書のおかげで神学を勉強し、自然に信者になったようである。聖書の字句は、子供の頃から強い感化を及ぼしたと語り、彼の作品の相当数がカトリック信仰の神学的心理を照らし出している。カトリック信仰の影響は、メシアンの人生を通して大きく占めている。キリスト教信仰の神秘、精霊の神秘が作品テーマとなっている。その信念は、音符やリズムとして表現されるのみならず、音色、色彩にも移し替えていると本人は語る。メシアンは、伝統的なミサ曲は書いていないが、信仰の真実を演奏会場に持ち込み、礼拝的な意味を込めていると言っている。彼のオルガニストとしての音楽活動も、礼拝に結ばれている。メシアンのオルガン作品は、多様な音色と多数の混合音栓音、手鍵盤で16フィート管がある大きな楽器を必要とする。オルガン作品の傑作として《精霊降臨祭のミサ曲》、《オルガンの書》などがある。オルガンで重要な基礎音、舌管音、混合音栓音の3つの系統の音色の仕組みから派生する音色、倍音構造は、管弦楽作品、ピアノ作品を書く際にも応用されている。

最後に、ピエール・ブーレーズと同じ時期に弟子であり、後にメシアンの妻になったピアニストのイヴォンヌ・ロリオからの影響を忘れてはならないであろう。メシアン自身、彼女のことを天才的なピアニストであると述べているように、彼のピアノ作品のほとんどは、彼女によって初演されている。彼女の存

在があったからこそ、メシアンのパノにおける様々な発展があったに違いない。ピアノは、メシアンのパノの主体となっており、本人もピアノを演奏し、彼のピアノへのこだわりの強さは、イヴォンヌ・ロリオの協力により満たされた。2台ピアノの為の《アーメンの幻想》は、彼女に捧げられた最初の作品で、彼女とメシアンにより初演されている。翌年、作曲された全20曲によるピアノソロのための《幼子イエスに注ぐ20の眼差し》は、2時間以上を要する大作である。両作品ともに、宗教的題材に基づき、鳥の歌など彼特有の音楽語法が盛り込まれている傑作である。作曲家にとって、音乐的に理解があり技術もある演奏家との出会いは、楽器の可能性を極める上で重要である。

メシアンのパノは、彼の信じる宗教的信念を根底に、人生で様々な芸術家達から受けた影響により、彼独自の音楽語法を結晶化したものであろう。